

## まえがき

「イスラーム映画祭」は、二〇一五年の一二月に始まった。

二〇代後半の頃に、沢木耕太郎氏の名著『深夜特急』への憧れから始めたバックパッカーの旅で、バン格拉デシュ、パキスタン、イラン、トルコといったイスラームが主要な宗教として広まっている国々や、あるいはかつてのイスラーム王朝の名残を残すインドの街々を訪ね、イスラームの文化やムスリムの人々の優しさに魅入られた私は、その旅以前の若い頃からアジアや中東など、どちらかといえば非欧米圏の映画を好んで見ていたこともあり、いつかイスラームの国や地域の映画に焦点を絞った映画祭を開いてみたいと、開催の数年前から企画を温めていた。

イスラーム映画祭は、いわゆる宗教としてのイスラームをテーマにしているわけではなく、イスラームが広まっている国々や地域を舞台にした映画、あるいはそこに暮らす人々を描いた映画を集めた映画祭である。もちろんイスラームが主流だからといってそこに暮らすのはムスリム（イスラーム教徒）だけとは限らないので、映画にはユダヤ教徒やキリスト教徒やヒンドゥー教徒、時には仏教徒など、様々な宗教・宗派に属する人々が登場する。したがって「イスラーム映画」というジャンルを定義づけたり、ましてや国や地域によって色とりどりに異なるイスラームをひと口に語ろうとしたりする意図はないのだが、企画当初は「多様なイスラームをひと括りにしている」「宗教としてのイスラームに対する誤解をかえって招きかねない」といった批判も少なからず受けた。

しかし、イスラーム映画祭で上映する映画をひとたびご覧いただければ、いかにイスラームが世界中に

広まっており、そしてそれがその国・地域の元来の文化と豊かに結びつき、人々の暮らしのなかに息づいているかがわかるのに相違なく、世界各地で一部の過激派が起こす事件の報道とともに伝わってくる、それこそイスラームをひと括りにとらえたイメージが、どれだけプロパガンダ的に喧伝されたものであるかを理解していただけるはずだ。そして映画によつてはテーマとして描かれる他宗教同士が共存する姿は、とかく「排斥」「分断」という言葉が付きまとう宗教そのものに対する偏ったイメージを覆してくれるに違いない。

このたび開催されるイスラーム映画祭の第三弾にあわせて作られた本書も、イスラームについての解説書ではなく、イスラームの文化が根づく国や地域を舞台にした映画を紹介するガイドブックである。今回は、イスラームとは歴史的に切っても切れない関係を持つ地域として、ヨーロッパの国々に暮らすムスリムの人々を描いた映画も多く取り入れた。

映画は、映し出される映像を通じて、自国にしながら世界中の国々や地域を訪ねると同様の体験ができる優れたメディアである。本書では、活字で紹介される映画を通じて、イスラームの国々をめぐる旅行記を読むような気分浸っていただければ、作り手として望外のよろこびである。最後に論創社と編集の志賀信夫さんにお礼申し上げる。

さあ、映画を通じて、イスラームの国々を旅するように――。

イスラーム映画祭主宰 藤本高之



#### 第四章 西アジア・中央アジア

##### トルコ

- 少女ヘジャル 112
- 二つのロザリオ 114

##### ジョージア

- 祈り 116

##### チェチェン

- コーカサスの虜 118

##### イラン

- マリアの息子 120
- ザ・リザード 122
- 法の書 124
- 花嫁と角砂糖 126

##### アフガニスタン

- アフガン零年 128
- ボクシング・フォー・フリーダム 130
- ソニータ 132

##### タジキスタン

- トゥルー・ヌーン 134

##### キルギス

- 馬を放つ 136

#### 第五章 南アジア

##### パキスタン

- 神に誓って 140
- BOL ～声をあげる～ 142

##### インド

- 十四夜の月 144
- 熱風 146
- ボンベイ 148
- ミスター & ミセス・アイヤル 150
- マイネーム・イズ・ハーン 152
- アブ、アダムの息子 154

##### バングラデシュ

- 泥の鳥 156

テレビジョン 158

#### 第六章 中国・東南アジア

##### 中国

- 神水の中のナイフ 164

##### タイ

- 蝶と花 166
- 改宗 168

##### マレーシア

- ムアラフ 改心 170

##### ブルネイ

- ドラゴン・ガール 172

##### フィリピン

##### 囚われ人

- パラワン島観光客21人誘拐事件 174

##### インドネシア

- カリファアの決断 176
- 三日月 178
- イクロクアーンと星空 180


#### コラム

- 1 ガーダ 古居みずえ 40
- 2 アラブの春とエジプト音楽 中町信孝 56
- 3 イスラームと婚姻制度 後藤絵美 72
- 4 マリ・そこにある危機  
～映画が語るリアリティ インボテ★飯村 82
- 5 イスラームと共に伝播した  
アラビア文字・学問 景山咲子 160
- 6 インドネシア映画の  
ムスリムファッション 野中葉 182

#### 資料篇

- 出典・参考資料 186
- 『イスラーム映画祭』関連映画初公開データ 189





## 映画で旅するイスラーム 知られざる世界へ 目次

まえがき 2  
イスラームの基礎知識 藤本高之 6

### 第一章 中東アラブ諸国

#### サウジアラビア

少女は自転車にのって 14

#### イエメン

古きサナアの新しき日 16

#### レバノン

西ベイルート 18

キャラメル 20

私たちはどこに行くの? 22

#### シリア

ラジオのリクエスト 24

シリア・モナムール 26

#### イラク (クルディスタン)

遺灰の顔 28

#### パレスチナ

ガリラアの婚礼 30

ガーダ パレスチナの詩 32

バラダイス・ナウ 34

ガザを飛ぶブタ 36

ラヤルの三千夜 38

### アメリカ

ザ・メッセージ 砂漠の旋風 44

### 第二章 北アフリカ・西アフリカ

#### エジプト

テロリストとケバブ 48

ヤコービエン・ビルディング 50

敷物と掛布 52

エクスキューズ・マイ・フレンチ 54

#### チュニジア

ある歌い女の思い出 60

バーバ・アジーズ 62

#### アルジェリア

アルジェの戦い 64

ビバ! アルジェリア 66

#### モロッコ

女房の夫を探して 68

長い旅 70

#### セネガル

母たちの村 76

#### マリ

トンブクトゥのウッドストック 78

禁じられた歌声 80

### 第三章 ヨーロッパ

#### マケドニア

ビフォア・ザ・レイン 88

#### ボスニア・ヘルツェゴビナ

サラエボ、希望の街角 90

#### オーストリア

二番目の妻 92

#### ドイツ

そして、私たちは愛に帰る 94

辛口ソースのハンズー丁 96

#### オランダ

ドゥーニャとデイジー 98

#### フランス

イブラヒムおじさんとコーランの花たち 100

もうひとりの息子 102

ジェロニモ 愛と灼熱のリズム 104

#### イギリス

やさしくキスをして 106

ロンドン・リバー 108



# イスラームの基礎知識

藤本高之

イスラームは、ユダヤ教とキリスト教の流れを受け継ぎ、七世紀のアラビア半島に誕生した一神教である。唯一絶対の神（アラビア語で「アッラー」）を信仰し、人類最後の預言者ムハンマドにくだされた啓示『クルアーン』（コーラン）を啓典（教典）とする。信者数はキリスト教に次ぐ世界第二位で、約一七億人が信仰している。信仰が広まっている範囲もアジアからヨーロッパ、アフリカまでかなり広い。

「イスラーム」とは、アラビア語で「神に帰依すること」を意味し、「神に帰依する者」を同じくアラビア語で「ムスリム」と呼ぶ（女性は「ムスリマ」）。

## イスラームとユダヤ教・キリスト教との関係

一神教は世界に数ある宗教のなかでユダヤ教、キリスト教、イスラームの三つのみとされている。唯一絶対の神を信じるのが一神教であり、「アッラー」「ヤハウェ」「ゴッド」は呼び方が異なるだけで同じ「神」である。つまり、この三宗教は同じ唯一神を信仰する兄弟のような関係なのである。ただ、預言者（神の言葉を預かる者）の言葉を聞いた人々の後世への伝え方の差が教義に大きく影響を与えている。

またイスラームでは、ユダヤ教徒とキリスト教徒を「啓典の民」と呼ぶ。「啓典の民」とは「神の啓示にもとづいて信仰する者」のことで、つまりムスリムも同じである。イスラームでは、神は一二万四〇〇〇人ももの預言者を通じて人類に啓示を与えてきたとされ、クルアーンにはそのうちの二五人が登場する。

そしてそのなかにはユダヤ教徒に遣わされたムーサー（モーゼ）や、キリスト教徒に遣わされたイーサー（キリスト）も登場する。そのなかでムハンマドは人類最大の預言者であり、神の言葉を完璧に伝えているとされることから、ムスリムこそが真に正しき神の信者と考えられている。ただ、「啓典の民」とムスリムはもとが同じであるから、敵対関係にならない限り共存しようというのが本来の姿なのである。

## 信仰

イスラームの信仰の基礎は、「六信五行」と呼ばれる六つの対象と五つの行為から成り立っている。

### 六信

神…全知全能の万物の創造主。

天使…神と人間の中間的存在。イスラームではジブリール（ガブリエル）、ミーカーイル（ミカエル）、イズラーイル（アズラーイル）、イスラーフィールが四大天使とされる。

啓典…ムーサー（モーゼ）にくだされた『モーゼ五書』、ダーウード（ダヴィデ）にくだされた『詩編』、イーサー（イエス）にくだされた『福音書』、ムハンマドにくだされた『クルアーン』の四つの啓典。

預言者…クルアーンには二五人の預言者が登場するが（諸説あり）、ここでは主に、アダム（アダム）、ヌーフ（ノア）、イブラーヒーム（アブラハム）、ムーサー、イーサー、ムハンマドの六人を指す。

来世…世界に終末が訪れると人間は神の前で「最後の審判」を受け、天国に行くか、地獄に行くかが決められる。イスラームが火葬を禁じているのは、最後の審判の時に肉体が必要とされるためである。

定命…すべての人間、あるいは万物の運命は神の意思によってあらかじめ定められている。

## 五行

信仰告白(シャハーダ)・・アラビア語で「ラー・イラーハ・イッラッラー(アッラーのほかにはなし)ムハンマド・ラスールッラー(ムハンマドはアッラーの使徒である)」と礼拝のたびに唱えること。

礼拝(サラート)・・日の出前・正午すぎ・日没前・日没後・就寝前の一日五回、カアバ神殿の方角に向かって祈ること。礼拝前に身を清めることをウドゥーという。

喜捨(ザカート)・・貧者を救済するための義務的な寄付のこと。財産に応じて課せられる事実上の税だが、人間の財産は神から与えられたものと解釈されるため、本来は自身を浄めるという意味である。自発的な喜捨は「サダカ」と呼ばれる。

断食(サウム)・・ラマダーンと呼ばれるイスラーム暦(ヒジュラ暦)第九月の約一カ月間、日の出から日没まで断食をすること。喫煙や性交渉も禁止。嘘や口論も慎み、貧しくて食べられない人々の苦しみに想いを馳せ忍耐力や自制心を養う。ムスリムにとって最も重要な行為であり、期間が明けると盛大に祝う。

巡礼(ハッジ)・・聖地マッカ(メッカ)への巡礼を、ヒジュラ暦第一二月の八日から一二日までの五日間で行うこと。この期間以外に行う巡礼は「ウムラ」と呼ばれハッジとは区別される。ムスリムであれば身体的、経済的に可能である限り一生に一度は果たさねばならないとされる。

## 偶像崇拜の禁止

イスラームでは偶像崇拜が禁忌とされている。人間が作ったものを崇めるのは神の唯一性を汚すことにつながるため、そのイメージを絵画や彫刻で表現することはできず、預言者の姿を描くことも許されない。したがって、モスク(礼拝所)には寺院や教会のように、内部に聖像など偶像とみなされるものが置かれ

ることはいっさいない。ムスリムはただ、絨毯などが敷かれた空間で、カアバ神殿のあるサウジアラビアのマッカの方角（キブラ）に向かって祈る。モスク内部のマッカ方面の壁には、ミフラーブと呼ばれるくぼみがある。

## スンナ派とシーア派

イスラームには、スンナ派とシーア派という二大宗派がある。現在、世界中のムスリムのうちの約九〇パーセントがスンナ派に属している。ムハンマド（五七〇頃～六三二年）は後継者を指名しなかつたため、死後、合議によってカリフ（最高指導者）が決められ第四代まで続いた（正統カリフ時代、六三二～六六一一年）。しかし、第四代正統カリフのアリーが暗殺されると後継をめぐって対立が起き宗派分裂した。

スンナ派は、ムハンマド死後の歴代カリフを指導者として認める一方、イスラーム共同体（ウンマ）の団結と合意形成を重んじる。その際に判断の礎とするのが、クルアーンとムハンマドのスンナ（慣行・範例）である。一方のシーア派は、第四代カリフのアリーとその子孫のみがウンマの最高指導者であるとする。その血筋には超常的な力が備わっているとし、最高指導者をどの子孫が受け継いだと考えるかで、様々な宗派に分かれた。このうち、主に今のイランとアゼルバイジャンに広まる十二イマーム派では、九世紀に姿を消した第一二代の最高指導者が、最後の審判の日に再び顕れると信じられている。そしてその不在の間はイスラーム法学者が代理を務めるものとされている。一九七九年の革命後のイランで、ホメイニなどの法学者が絶大な権力を持っているのはこうした背景があるからである。



## イスラームの誕生と世界への拡大

イスラームは西暦六一〇年頃、天使ジブリールから神の啓示を授かり、預言者であることを自覚したムハンマドが、アラビア半島のマッカで偶像崇拜を禁じる一神教を唱えたことに始まる。多神教を信じるマッカ住民の迫害を受けたムハンマドは六二二年、今のマディーナへと拠点を移し、この地に彼を最高指導者とするウンマを作った。これをヒジュラ（聖遷）と呼び、この六二二年がイスラーム暦（ヒジュラ暦）の元年とされている。その後、ムハンマドはウンマを拡大させ、マッカを征服。カアバ神殿から偶像を取り除き、ついにはアラビア半島を統一するまでになる。そしてムハンマドの死後もイスラームは貿易などによって勢力の拡大を続け、やがてそれはイスラーム王朝の成立へとつながってゆく。

### 【ウマイヤ朝（六六一～七五〇年）】

ムハンマドの死後、アラブ人ムスリムはカリフのもとでササン朝を滅ぼし、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）からシリアとエジプトを奪って征服地を拡大する。しかし、カリフ位をめぐる抗争の結果、第四代カリフのアリーが暗殺され、政敵であったウマイヤ家のムアウィヤがカリフとなりダマスカスに政権を開く。それがイスラーム史上最初の王朝ウマイヤ朝である。その最大版図は今のパキスタンからスペインまでおよぶほどのものであった。

### 【アッバース朝（七五〇～一五一七年）】

イスラーム史上第二の王朝であるアッバース朝は、ウマイヤ朝とは異なりアラブ人でなくともムスリムであれば平等な権利を認め、イスラームの黄金時代を築いた。第二代カリフのマンスールはバグダッドを首都と定め、政治、経済、文化の中心地とした。しかし、九世紀後半から徐々に弱体化し、一二五八年に

モンゴル軍の侵攻によって崩壊する。だが、カリフ位だけは一五一八年にオスマン帝国のスルタンによって廃位されるまで存続した。

【オスマン帝国（一二九九～一九二三年）とムガル帝国（一五二六～一八五八年）】

自国の衰退に加え、聖地エルサレム奪還を目指すヨーロッパ・キリスト教圏からの十字軍襲来や、モンゴル帝国の侵攻などが重なってアッバース朝が滅亡すると、イスラーム世界は多くの王朝が興亡を繰り返す時代に突入する。そのなかで近代まで続く大国家を繁栄させたのが、いずれもトルコ系のオスマン帝国とムガル帝国である。オスマン帝国は「啓典の民」の原則を踏襲して多民族・多宗教国家を実現し、ムガル帝国は華やかなインド・イスラーム文化を栄えさせた。

●アフリカ・北アフリカには早くからイスラームが広まり、王朝も多数生まれ、イベリア半島に進出することもあった。アルハンブラ宮殿はその名残である。また西アフリカで一三世紀に興ったマリ帝国、一五世紀に興ったソンガイ帝国もイスラームを享受し、トンブクトゥはソンガイ帝国のもとでイスラームの学問都市として栄えた。

●中央アジア・インド・中央アジアやインドにまでイスラームが拡大したのはウマイヤ朝の影響である。中央アジアはモンゴル帝国に征服されるが、その統治下でムスリムは優遇され、イスラームは逆に広まった。中央アジアの国々は今もイスラームが主流である。インドではいくつかのイスラーム王朝が興亡したが、ヒンドゥー教も損なわれず、経済や文化面でムガル帝国の基礎を作った。

●中国・東南アジア・中国では新疆ウイグル自治区にムスリムが多いほか、イスラームを信仰する回族が中国全土に広く散らばって暮らしている。インドネシアを中心とする東南アジア諸島部には、西アジアやインドの商人によってイスラームがもたらされ、一四世紀末頃にマラッカ王国が興るとさらに広まった。

# 中東アラブ諸国

## *Middle East Arab countries*

### ◆シリア

1,830 万人

イスラーム 90% (スンナ派 74 : その他 16)

アラビア語

### ◆イラク

3,830 万人 クルド人人口は約 2 割

イスラーム 99% (スンナ派 35 : シーア派 65)

アラビア語

### ◆サウジアラビア

3,290 万人

イスラーム 100% (スンナ派 85 : シーア派 15)

アラビア語

アメリカ

### ◆アメリカ

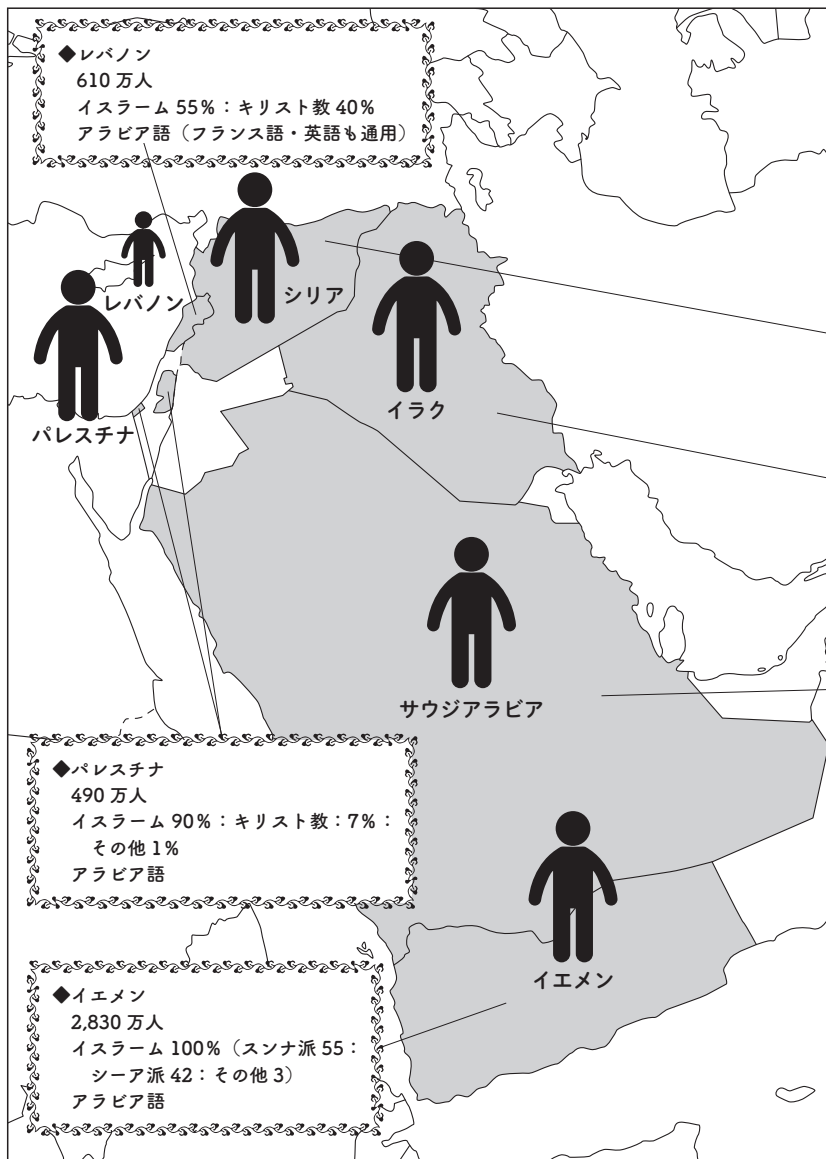
3 億 2,450 万人

イスラーム 0.9%

主として英語

地図中の人のイラストは、大きさによって各国のイスラームの%を正確な比率ではなくイメージとして示す

# 第一章 中東アラブ諸国



**〈編者・著者〉**

**藤本高之**（ふじもと・たかゆき） 1972年生。イスラーム映画祭主宰。アップリンク配給サポート・ワークショップ受講を経て、2010年北欧映画祭「トキョーノーザンライツフェスティバル」に参加（以後5年間）。2015年にイスラーム映画祭を個人で立ち上げる。2017年第2回、2018年第3回開催。

**金子遊**（かねこ・ゆう） 1974年生。批評家、映像作家。『neoneo』編集委員。『映像の境域 アートフィルム／ワールドシネマ』サントリー学芸賞受賞。著書『辺境のフォークロア』『異境の文学』『映像の境域』『ドキュメンタリー映画術』（小社刊）。編著・共訳書・共著多数。映像作品『ベオグラード1999』『ムネオイズム』『インベリアル』。

**景山咲子**（かげやま・さきこ） 日本イラン文化交流協会事務局長。

**勝畑冬実**（かつはた・ふゆみ） 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 Jr.フェロー。エジプト映画の翻訳も手がける。

**後藤絵美**（ごとう・えみ） 東京大学 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク特任准教授。著書『神のためにまとうヴェール』中央公論新社。

**佐藤奈緒子**（さとう・なおこ） 映画ライター、ドキュメンタリーマガジン『neoneo』編集委員。

**高橋雄太**（たかはし・ゆうた） 映画ライター。『ことばの映画館』他で執筆・編集。

**中町信孝**（なかまち・のぶたか） 甲南大学文学部教授。著書『「アラブの春」と音楽 若者たちの愛国とプロテスト』DU BOOKS。

**野中葉**（のなか・よう） 慶應義塾大学総合政策学部専任講師。著書『インドネシアのムスリムファッション』福村出版。

**古居みずえ**（ふるい・みずえ） 映画監督、ジャーナリスト。アジアプレス所属。最新作『飯館村の母ちゃんたち 土とともに』。

**ンボテ★飯村** 本名：飯村学（いいむら・つとむ）。仏語圏に精通するアフリカ・プロモーター。コートジボワール在住。ブログ『ぶらぶら★アフリック』。

## 映画で旅するイスラーム～知られざる世界へ

---

2018年3月10日 初版第1刷印刷

2018年3月20日 初版第1刷発行

編者 藤本高之、金子遊

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／大村雄平

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1692-0 © printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。